

株式会社 ^{エートゥー} Ato 代表
高尾真人



仕事で一時帰国したときに取材。神田キャンパス黒門前で撮影

スポーツで日本とカナダを繋ぐパイオニアに

子供のころから大学まで力を入れたサッカー、そしてカナダ留学…それまでの経験すべてが今の仕事に生きている。家族とともにカナダに移り住み、スポーツ留学に特化したエージェントを手掛ける高尾真人さんが思い描く夢とは。

カナダ西海岸の都市ビクトリア。街には季節折々の草花があふれ、英国領時代の面影を残す美しい石造りの建物が並ぶ。高尾真人さんはこの街を拠点に、日本とカナダをスポーツで結ぶエージェント業を営む。

メインの仕事は、スポーツ奨学生制度を利用したサッカー留学の仲介だ。さらには、ラクロスやカーリングといった競技で日本人選手のカナダ遠征のコーディネーター、カナダやアメリカの選手のなでしこリーグ移籍の仲介など、様々な依頼に対応してきた。今年1月には、J3いわてグルージャ盛岡とカナダのヴィクトリア・ハイランダーズ FC の選手・文化の交流を目的とした協定締結にも携わった。

カナダに住んで1年と4カ月。今、一つ一つ実績を積み重ねている。

仕事の柱となった、サッカーとカナダ留学

専修大学では体育会サッカー部に所属。生田キャン

たかお まさと

1984年千葉県船橋市生まれ、2003年津田沼高校卒。07年専修大学経営学部卒業後、カナダに留学。09年バンクーバーアイランド大学でMBA取得。帰国後、川崎フロンターレに就職し、試合運営、イベント企画に携わる。17年1月退社し、株式会社Atoを設立。18年1月カナダに生活の拠点を移す。Atoのホームページは <http://ato.academy>

パスで朝6時から始まる練習に間に合うように、千葉県船橋市の自宅を毎朝4時に出ていた。

「おかげで必ず1限に間に合う時間に大学にいますから、授業は遅刻もせず、きちんと出ていました(笑)」

サッカーを生活の中心にしながら、櫻井通晴(現名誉教授)ゼミではゼミ長を務めるなど、勉強もしっかりやっていた。さらにサッカースクールのコーチを務めるなど、「目いっぱい生きた」という大学時代。

しかし4年生になり、周りが就活を始める中、ふと考える。「このまま社会人になっていいのだろうか」。やりたいことが見えなかった。就職をせずに、留学の道を選ぶ。

「周りに留学する友人も多く、その影響もありました。さらに英語教師をしている父の後押しも大きかった」

卒業後、カナダのバンクーバーアイランド大学に2年間の留学。最初の1年間は大学付属の語学学校で英語を習得し、2年目に大学院でMBA(経営学修士)取



カナダ留学時代



得に取り組んだ。

勉強は相当ハード。朝8時から午後3時まで授業を受けた後、大学の図書館に残って閉館する夜の10時まで勉強して寮に戻る。

そんな忙しい生活の中、2年目からは地元の社会人サッカーチームに所属した。平日に1回練習して、週末に試合を行う草サッカーだったが、この環境が英語のトレーニングに最適だったという。

「ネイティブに囲まれて、英語を話さないとチームワークを築けませんでした。友達の幅も広がり、英語がみるみる上達していきました」

国籍や人種の壁を越えて、互いの距離を一気に縮めるスポーツの力も実感した。もともと持っていたスポーツビジネスへの関心はより高まった。

スポーツと英語を学ぶ留学を

帰国後、川崎フロンターレに就職。試合運営を4年、集客のためのイベント企画を3年。がむしやりに仕事に没頭した。その一方で、留学時から、ずっとビジネスプランを温め続けていた。

「もし誰か先に始めてしまう人がいたら、やめようと思っていましたが、7年経っても誰も手を付けていなかった。だったらやったもん勝ちだと思って、スポーツ留学に特化したエージェントを始めました」

留学時、驚いたことの一つにカナダの充実したスポーツ環境がある。芝のグラウンドがあちこちに整備されていた。夜になればナイター照明が付き、誰でも自由に使えるように開放されているところもあった。

「ウィンタースポーツはもちろん、球技も盛んで、環境

が整っています。そして、どんなレベルの人もスポーツを楽しんでいる。こうした国で、スポーツをやりながら英語を学ぶ。留学の一つの形として広めていければと思います」

選手としての実力を大学に認められればスポーツ待生として奨学金を受けられるケースもある。高尾さんが推奨する「AA(アスリート・アカデミック)留学」なら、格段に安い学費で留学できるという。

「中途半端な思いで競技をやめていく若者もいますが、留学して納得いくまで、とことん競技を続けるというのも一つの選択肢だと思います。そこで英語も身に付けられれば、その後のキャリアに生かせます」

さらに留学には「視野を広げ、新たな価値観を得られる」という意義もある。高尾さん自身も留学を通して価値観が大きく変わった。

今も心に残る光景——バンクーバー島郊外のくたびれた民家。ボロをまとい、ビール飲みながら庭いじりをする老人。経済的には決して恵まれていないのに、なんとも幸せそうな顔をしていた。

「留学までは、いい会社に入って、いい給料をもらって、いい暮らしをするのが全てみたいに思っていたのですが、自分の人生で何が大切かということを考え直すようになりました。今の私にとっては家族との時間が何より大切です」

株式会社「Ato」の社名には、Aから始まる3つの言葉、アスリート、アカデミー、アブロードスタディ(留学)の意味を込めた。そしてもう一つ、起業する少し前に生まれた長男の名前「永人」にも掛けている。

高尾さんはカナダの地で「スポーツを通して日本とカナダを結ぶ」という夢を、「家族との時間を大切に」しながら、かなえようとしている。